
とある科学のAIMマスター

GNT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学のAIMマスター

【Nコード】

N0155R

【作者名】

GNT

【あらすじ】

長点上機学園一年生の上村秀征は特殊な能力を持っていた。レベルは2だが何年もの間身体検査を行っていないためその力は未知数だったが、ある出来事によって彼の力の大きさが発覚する。原作の話もすこしはいると思いますが時系列は無視して行きます。戦いもあります。ほのぼのの気持ちもいれていきます。原作キャラの性格が変わっていることもあると思いますがご了承ください。またパワーバランスが崩れてしまうようなこともあると思います。

キャラ説明

上村秀征 うえむら ひでゆき

長点上機学園一年生。身長175、体格は標準、髪は天然パーマでボサボサ、顔は格好いいとはいえないが格好悪くもない。周りからは「ひで」と呼ばれている。正義感がとても強い。レベル2だが特殊な能力なため長点上機学院に在籍している。

能力は「AIMマスター」。謎の多い能力でAIM拡散力場の力を操ることができる。

中村真奈 なかむら まな

長点上機学園一年生。身長160、スタイルはよく顔も綺麗でけっこうモテる。髪は長く後ろで止めている。能力はレベル4の「精神感应」。秀とは幼馴染で寮も近いためよく一緒に帰っている。

#1 AIMマスター

7月19日

長点上機学園一年の上村秀征は明日からハイな気持ちで友人の寮へ向かっていた。秀征は明日から夏休みということが異常なまでに嬉しかった。

秀征はその友人に寮へくる途中のコンビニで漫画を買ってきてきてくれと頼まれていた。鼻歌を歌いながらコンビニの中にはいつて頼まれていた漫画を探していた。

(あれ?ないぞ・・・)

が見つからずかなりの時間探していた。必死に探していると自動ドアが開く音がして柄の悪い5人組が入ってきた。一度そちらをみて秀征はまた漫画を探し始めた。

「おい!!!うごくな!!!!!!」

いきなり大声が聞こえた。ビクツとして声の聞こえた方をみるとさっきの5人組の一人がレジの店員に拳銃を向けていた。残りの4人は自動ドアの前にいた。コンビニ強盗だ。

(えっ?まじ?最悪だ・・・)

店員は怯えている。秀征はとりあえず周りを見た。自分以外客はいないようだ。

(しゃーない。やるか!)

秀征は自分の正義感に従い攻撃することにした。書類上はレベル2で応用的なことは苦手だが力には自信があった。右手にA I M拡散力場の力を集める。それによって秀征の右手が薄く青白く光った。

「おい！おまえら！！！！！」

「ああん？」

秀征の声に自動ドア前の一人が反応した。

「大人しくしろ！」

「は？ガキは黙ってる！！！」

強盗は秀征に向かって走ってきた。秀征は右手を握ったまま向かってくる強盗に向けた。普通なら右手が光っているのに警戒しない奴はいないがその光はあまりにも薄く肉眼ではわからなかった。なので強盗は秀征が何をしているのか理解できなかった。

秀征は強盗が目の前まで来るのを待っていた。そして強盗が目の前にきたことを確認すると右手から青白いビームを放った。秀征の目の前にいた強盗は避けられず腹にビームが直撃して吹っ飛んだ。

「ぐあああああああ！！！！！」

後ろにいた三人の強盗も吹っ飛んできた強盗に巻き込まれ四人とも倒れた。

「手加減しといたから大丈夫だよ」

でかかった。火球とぶつかったと思ったらすぐにビームは火球を消していった。秀征は予想外に出力が強かったので火球を消したあと出力を弱めた。そして強盗に直撃した。

「ぐはあああああああああ！！！」

強盗の叫びとどつじに店内で爆発が起きた。秀征は強盗が心配だったが黒こげになってピクピクしているのを見てホツとした。

「災難だったな。」

「災難でもんじゃないって。いきなりコンビニ強盗なんて心臓に悪すぎるって。」

秀征はあの後、面倒なことに巻き込まれる前にコンビニを出て友人の寮へ向かったのだ。それで今は友人の部屋でさっきのことを話していたのだ。因みに友人というのは長谷川亮はせがわりょうといって秀征の親友だ。

「そんな命がけで俺の漫画を買いにいつてくれたひでのために今日はファミレスで何か奢ってやるよ。」

「まじ？じゃあお言葉に甘えて。」

実は今月はもう財布が厳しい秀征にとっては嬉しいことだった。

夜になって秀征と亮はファミレス行った。中に入ると一人でいる少女が数人の男に絡まれていた。服からして常盤台の生徒だろう。

「あれやばくね？」

「変に関わると面倒臭いぞ。」

秀征は少し助けようと思いきや、亮にそう言うのが亮は嫌そうだった。だが秀征は正義感が強い男だ。助けようとして一歩踏み出した時、一人のツンツン頭の少年が少女に絡んでいる男に話しかけた。

「ちょっと君たち。彼女困ってるじゃないですか。」

そう言っているとトイレから柄の悪い男たちがたくさん出てきた。おそらく少女に絡んでいる男の仲間だろう。

そしてツンツン頭の少年はファミレスからでて逃げ出した。それを追って男たちも全員ファミレスからでて行った。

「な？面倒臭くなつたらどう？」

「ああ。」

だがこれで少女は助かった。ツンツン頭の少年も本望だろうと秀征は思った。

#2 中村真奈(前書き)

絶対能力者進化実験はもう終わったことにして当麻も記憶を失っていないことにします。

#2 中村真奈

8月10日 AM9

長点上機学園寮

秀征は寝ていた。夏休みですっかり起きるのが遅くなってしまった。長点上機学園には夏休みの宿題というものがなくて実にゆったりした生活を送っていた。秀征は朝11時に起きてよる12時に寝るといふ生活になっていた。そのため朝9時というのはまだまだ起きそうにない時間だ。最低後2時間は寝るつもりだ。だが...

ブルルル...プルルル...プルルル...

今日は違った。携帯電話の着信音がまるで目覚まし時計のように鳴り響いた。なかなか鳴り止まない音に秀征は起きてしまった。まだまだ寝たりなさそうだ。布団に入ったまま携帯電話をとって画面をみると「中村真奈」と出ていた。

「...もしもし...」

『おはよう!どうしたの?』

「いや、眠くて...」

『なんか起こしちゃったみたいね。ゴメンね。』

「大丈夫大丈夫。それで、どうした?」

『ああ、そうだった。今日暇？』

「今日というか夏休みはずっと暇だぜい！」

『じゃあ一緒に地下街に遊びにいかない？』

「え？俺はいいけど俺なんかより友達といった方がいいんじゃないか？」

『いいの。ひでも友達じゃない！』

「なら俺でよければ。」

『じゃあ午後1時に地下街の入り口に来てね。』

「おう、分かった。」

通話が終わり秀征は携帯電話をとじた。そして布団からでて適当なTシャツとジーンズに着替えて顔を洗った後何か食べようと冷蔵庫を開けたら焼きそばパンが一個あった。“これしかないのか”と思いつつ焼きそばパンを取りだして食べると変な味がした。包んであったラップをみると消費期限が10日もすぎていた。

(こつこついうのをなんて言うのかな？・・・馬鹿だなア俺って・・・)

P M 1

地下街入り口

秀征は待ち合わせ場所に来ていた。暇だったので早めに寮を出てきたら30分前に到着してしまつてずっとベンチに座つて携帯をいじっていた。

「ひでー！」

自分と呼ぶ声かして顔を上げるとそこには中村真奈がいた。服装は水色のブラウスにふくらはぎまでほどのパンツをはいていた。

「ゴメンね。待った？」

「いや、俺も今きたところ。」

とお決まりのセリフを使う秀征。実は真奈の可愛さに緊張している。

「じゃあ行こうー！」

真奈はそう言つて秀征の手を掴んで地下街に入つて行った。

地下街

「で、なにすんの？」

「うーん、どうしようかなー。」

どうやらなににするか決めてないらしい。うーんとなにしようか迷っている真奈をみて秀征はドキドキしていた。そして耐えられなくなった秀征は咄嗟に見つけたライトの掲示板でチ力チ力しているゲームセンターを指差して言った。

「ゲームセンターに行こうぜ。」

「え、でも私ゲーム下手よ。」

「いいからいいから」

秀征は真奈の手を握ってゲームセンターの中に入って行った。

ゲームセンター

「何かやりたいものとかあるか？」

「うーん、わかんない。」

「じゃあUFOキャッチャーしようぜ。」

秀征は近くにあったUFOキャッチャーをみていった。近づいて中を覗くといろんな種類の小さなぬいぐるみがあった。

秀征は百円を投入してスイッチで操作を開始した。秀征はクマのぬいぐるみを狙った。UFOはクマのぬいぐるみを掴んだが後一步の

ところで落としてしまった。

「くそー」

「惜しかったね。」

「まだまだもう一回！」

そう言っつて秀征はもう一度百円を投入した。今度は搦んだ後途中で落とさず手に入れることが出来た。

「よっしゃー」

秀征は出てきたクマのぬいぐるみをとって真奈に渡した。

「ほら、やるよ。」

「え？私に？」

「いらなかったら別にいいけど。」

「そんなことないよ。ありがとう。」

真奈は持つてきていたバッグにさっそくぬいぐるみをつけた。嬉しそうだ。その顔を見て秀征は少しだけドキツとしていた。

「次は何す……」

秀征が話し始めると、突然ゲームセンターというより地下街の照明が全て消えた。

(なんだ？停電か？)

そう考えていたら今度は”ドカン！！！”と激しい音と同時に強烈な風が吹いた。非常電源で少しだけ明かりがつくと瓦礫が散乱していた。その中に数人の人も倒れていとライトの掲示板が落ちていた。間違いない。ゲームセンターのものだ。さっきまで賑やかだった地下街が一気に悲鳴に埋めつくされた。

「何？・・・これ？」

「真奈！ここから離れるぞ！」

「う、うん。」

秀征は真奈の手を握ってゲームセンターからでて行こうとしたが地下街は混乱していてなかなか逃げられない。立ち往生していると秀征と真奈の真上の天井が壊れて瓦礫が落ちてきた。秀征は真奈を抱いてダイブした。体に少し痛みが走った。

「真奈、大丈夫か！？」

「うん、ありがとう。」

真奈の無事を確認した後秀征は立ち上がった。そのあと真奈も立ち上がった。秀征はさっきまで混雑していた出口を見ると誰もいなかった。だがゲームセンターのシャッターが閉まり始めていた。

「ウソだろ？くそ！」

秀征は真奈の手を握って走ったがシャッターは閉まり切ってしまっ
た。店内は静かになっていた。おそらくもう二人しかいないだろう。

「なんで閉めんだよ！？しょーがない能力で・・・」

だがそこで真奈ではない別の声が聞こえた。

「おいおい、せっかく閉めたんだから壊すなよ。」

後ろをみると長身・茶髪でヤクザ予備生＋新人ホストのような風貌
の少年が立っていた。

「お前が閉めたのか？」

「ああ。」

嫌な空気が漂う。真奈は怯えて秀征の左手にしがみついている。

「お前、誰だ？」

「垣根提督」

#2 中村真奈(後書き)

感想をお願いします。

#3 垣根提督（前書き）

ついに受験が終わりました。でもボロボロでした。落ちるかもしれ
ない・・・
いや望みは捨てない！！！！

#3 垣根提督

「垣根提督？」

秀征はその名前を聞いて少し考えていた。聞き覚えがあつたからだ。が、思い出せなかった。

垣根は余裕の表情をしているが秀征は彼から何か悪意を感じていた。秀征はとりあえず逃げる方法を考えていた。すると、垣根が口を開いた。

「単刀直入に言う。その女を引きよこせ。そうすればお前には手を出さない。」

「真奈を・・・？」

さっきまで逃げる方法を考えていたが、一気に頭が真っ白になってしまった。

(どういうことだ？真奈がどうして？)

「真奈、あいつのこと知ってんのか？」

「し・・・知らない・・・どうして私を？」

真奈を見ると小刻みに体が震えていた。あきらかに恐怖を感じている。

「てめえ、どうして真奈を！？」

「あん？そんなのお前には関係ねえよ。いたい目みたくなかったらさっさと消える。」

「ふざけんな！そんなことできるか！」

秀征は若干恐れていたが、怯えている真奈を見て助けることを決意した。

「そうか、それは残念だ。」

垣根の背中に天使の翼のような六枚の発光する翼が現れた。その姿に秀征は今までに無いほどの恐怖を感じた。

「今更だけど、お前、誰を相手にしてるかわかってるのか？」

「……」

「俺は学園都市第2位の未元物質^{ダークマター}だ。」

「第2位？」

「今頃わかったのか。まあ運がなかったな。」

垣根は翼から氷の様な鋭利な物質を飛ばしてきた。第2位と聞いて驚いたが、それでようやく秀征は垣根のことを思い出した。

（能力の未元物質は確かこの世に無いものを作り出す能力だったな。）

秀征は真奈の手を引いて全速力で走り出した。氷の様な物質は以外

垣根はまた氷の様な物質を無数に飛ばしてきた。秀征はよけようとせずに落ち着いて演算を開始した。苦手な自分の能力の応用を使うことにしたからだ。

（レベル5といっても能力者だ。あいつのAIM拡散力場に割り込んで自分だけの現実を乱せば・・・）

すると、無数の氷の様な物質は秀征に当たる直前で向きを変えた。

（くそっ、自分だけの現実を乱せたがああ程度じゃ限界が・・・）

「お前・・・そうか、それがお前の能力か。珍しいものだな。」

「なっ？てめえ・・・俺の能力がわかるのか？」

「ああ、お前の能力はおそらくAIM拡散力場を操るものだろ？そして今のは俺の出しているAIM拡散力場に割り込んで自分だけの現実を乱したんだろ？」

「クソツタレ！！！」

秀征は両手にAIM拡散力場を集中させ、最大威力でビームを放った。最大威力なだけにかなり大きいものになっていた。

垣根には青白く大きなビームが迫っている。垣根は翼で自分の前面を覆う様に広げた。

秀征の最大威力のビームは垣根の翼に激突した。しかし、最大威力であるにもかかわらず、ビームは翼にいと簡単に弾かれてしまった。

「そ、そんな・・・」

「何？お前、本当に勝てると思ってたのか？馬鹿じゃね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、やっぱり無理か・・・」

「そつだ。おとなしく殺されるよ。」

「待ってくれ！最期にどうして真奈を狙ったのか教えてくれ！」

「・・・まあいい、教えてやる。俺は依頼を受けてきただけだ。別に引き受けるつもりはなかったが報酬がとてもよかつたんだよ。報酬の内容は言えねえがな。」

「じゃあ、どうしてそんな依頼がきたのか知らないのか？」

「あんま知らねえが何かの実験のためだったな。その被験者に選ばれてしまったってことだったと思う。確かあの女の能力は精神感応で、しかも普通とは違う特殊な力もあるんだとよ。」

「被験者？・・・許さねえ・・・絶対に許さねえ・・・」

「そう言っても、お前はもう死ぬんだ。運がなかったな。俺に喧嘩を売ったのが運の尽きだったな。」

垣根は翼を縦にして剣の様にして秀征に振り落とした・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0155r/>

とある科学のAIMマスター

2011年10月8日17時20分発行